

令和元年度 学校防災推進協力校 研究最終報告書

校 名 掛川市立東中学校
校長氏名 梶 本 忠

1 研究主題

「災害に関するさまざまな知識や実践力を身に付け、災害発生時に地域の主力となって行動できる生徒の育成」

2 学校の実態（教員数、学級数、児童生徒数、学校・地域の特色等）

【教員数】 36名（市職事務2名を含む）

【学級数】 19学級

（1年5学級、2・3年各6学級、知的1学級、自閉症・情緒1学級）

【生徒数】 538名（令和2年1月6日現在）

【学校・地域の特色等】

本校は、掛川市の北部(旧掛川市南部)に位置している。掛川駅を中心に、北は掛川バイパス周辺から、南は小笠山麓まで広がり、この中を国道一号線、東名高速道路、東海道線や新幹線といった主要幹線が通過している。昭和22年の開校から、今年で72年目を迎える伝統校で、女子のセーラー服の一本ラインに見られるように、掛川市で「第1番目の学校である」という自負が地域や保護者、地域にもある。掛川市の中心地である一方、郊外には新興住宅地が次々に誕生しており、地域の人口も増加中であることから伝統と進取な気風が相まって、新たな活力となっている。

防災面から地域を見ると、海岸線から離れているため、津波による被害こそ想定されていないが、市の中心繁華街から山や田畑の多い周辺部まで多様な状況や地形が存在し、家屋の倒壊や土砂崩れ、液状化現象などの様々な被害に備えなければならない状況にある。また、災害時には救護所と広域避難所に指定されているため、避難所運営等の備えも行っておかなければならない状況にある。

また、地域住民は、本校の教育活動に大変協力的で、地域とともに生徒を育てるという強い意識をもって日ごろから学校と関わってくださっている。

本校は、掛川市の中心校として、これまで様々な先進的な教育活動を積極的に行ってきたが、上記のような状況を抱えているにも関わらず、防災教育に関しては、周辺他校と比べても多少遅れていると感じられる。

そこで、学校防災推進協力校に指定されたことを大きなチャンスととらえ、本校の防災教育を積極的に推進していきたいと考えている。

3 研究経過

(1) 研究の全体計画

- ・ 学校教育目標 「うつくしく りりしく」－美しく凜とした生徒－
- ・ 重点目標 「学び合い」

【学校基本姿勢：開かれた掛東中】

開かれた学校・地域

- ・掛東学園子ども育成支援協議会で協議
- ・掛川学へ講師、各学年地域学習
(防災学習、職場体験、区長さんと語る会)
- ・地域活動への学校参加
(ボランティア、吹奏楽公演、展示等)
- ・学校支援者との継続的交流

開かれた職員・組織

- ・職員間の連帯の促進
- ・学校組織にそった実態把握
- ・学校組織にそった職員の合意形成
- ・見合う、伝え合う、支え合う
- ・「職員の学び合い」
- ・同僚性を高め合う職員
(不祥事0)
- ・システムによる勤務時間の適正管理

開かれた生徒

- ・日常のかかわり合い活動
(学級活動、係、生徒会委員会活動)
- ・コの字型座席配置、小集団活動で力をあわせて、やる気の共有、困り感の共有
- ・生き生きサロンなど外部交流
- ・平和学校宣言、平和集会

【学び合いの学校づくりの重点】

① 学び合い ② 掛川学 ③ 平和 ④ 東陵祭 ⑤ 個性伸長の部活

学び合いの授業

研修テーマ: 仲間との学び合いを通して全員が「わかった」「できた」と感じる授業づくり

聞いてくれる仲間、話しかけてくれる仲間がいれば…

1 「自分は、受け入れられている。」

【所属感】

2 「自分は、考えを伝え合える」

【コミュニケーション力・社会性】

3 「自分は、進んでやってみる。」

【主体性】

4 「みんな わかった。できた」

【学力向上・互恵性】

掛川学

- ・1年「防災を通して、掛川を知る」
- ・2年「掛川で働く」
- ・3年「掛川を考える」ことにより、自分や地域を理解し、自分のこれからの在り方を考える。
- ・講話の他、職場体験、区長さんと語る会

平和

- ・開かれた学校・学年・学級
- ・相互に声をかけ合う支持的風土
- ・個性伸長とチームを学ぶ部活動
- ・現状報告と対応決定の支援会
- ・学び合いの授業づくり推進
- ・平和学校宣言、平和集会
- ・不登校0への挑戦

【学び合いの学校づくりの組織的取り組み】

学び合う雰囲気をつくり、聴く・考える・表現する生徒を育てる。

学びづくり

- ・授業づくり3原則と挨拶
- ・ボランティア協力推進
- ・保護者連携の家庭学習推進
- ・人権教育の推進
- ・ICT機器の効果的活用

温かな人間関係を築き、誠実な態度で生活できる生徒を育てる。

安心づくり

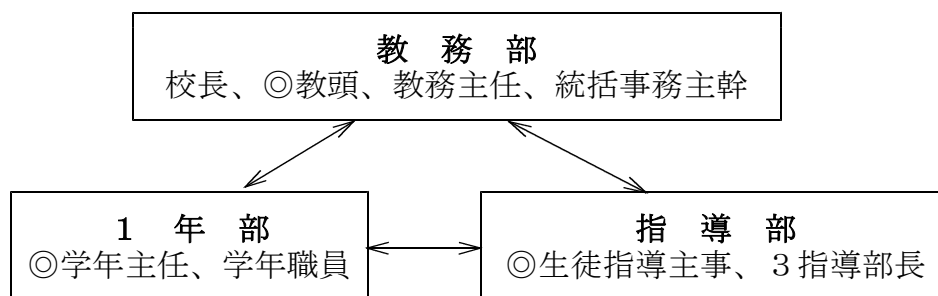
- ・自然に挨拶ができる生徒
- ・交通安全指導
- ・ふれあいルーム
- ・トイレ清掃指導強化
- ・安全で清潔な環境

他とのかかわりを大切に、自分から進んで行動する生徒を育てる。

活動づくり

- ・人間関係づくりプログラムの実施
- ・東陵祭の思い・テーマ・スローガン
- ・部活動の在り方検討

(2) 研究組織



(3) 1年次の研究の内容等

本校では、1年生を対象に防災教育を進め、災害に関する様々な知識や実践力を身に付けることにより、「助けられる人から助ける人へ」の意識を強くもち、自信をもって地域に貢献できる生徒を育成を目指す姿とした。

ア 学習計画

月	日	学習事項	学習内容	備考
4	13	オリエンテーション	学習の目的と学習内容を確認する。震災について知る。	東日本大震災の記録DVD
4	19 4 25	防災の視点で学校を 観る	災害時、どう避難する？ 調査・提案づくり	校地地図 ワークシート
4	27	体験内容について調べる 調べる内容を決める	※音楽室でタブレット等を使って調べ学習 ① AEDって何？ ② 心肺蘇生って？ ③ 広域避難所って何？ ④ トイレはどうするの？ ⑤ 食事はどうするの？ ⑥ 寝る時どうするの？ ⑦ 震災関連死って？ ⑧ 非常持ち出し品は？ ⑨ 家庭内の備蓄は？ ⑩ けがをした人がいたら？ ⑪ 自分の通学路は安全か？ ⑫ 家族の安否を知るには？	5月と10月の体験内容を含め、防災に関する事柄を調べ、レポートにまとめる
5	2	学年避難訓練	①避難経路の確認 ②特別教室から避難	
5	7	調べ学習(4回)	音楽室にタブレットを用意 学級ごと、PC教室・図書室なども使って調べ学習をする	レポートは、テーマごと1冊にまとめ、廊下に展示
5	8	事前学習	体験ごと学習内容・持ち物を確認する	

月	日	学習事項	学習内容	備考
5	9	防災学習の日	<p>体験1「AED・心肺蘇生法」 救急救命法の講習を受ける。</p> <p>体験2「避難所としての東中」 「テント設営訓練」 東中に避難所が設営されたことを想定し、グラウンドにテントを設営する。</p> <p>体験3「消火器・救助袋の使用方法」 南校舎の救助袋を設営し、実際に使用する。消火器の使用方を学習し、火元にめがけて消火活動をする。</p>	<p>消防署員5人</p> <p>教頭、教員</p> <p>消防署員4人 エト・イー・エム</p>
6	10	学習のまとめ	<p>防災新聞の作成・お礼の手紙 自分が体験したことについて新聞の形でまとめる。調べたことと重複してもよい。</p>	<p>新聞づくり 廊下に掲示</p>
7	5	自分の通学路は安全か	<p>夏期休業中に自分の通学路を中心に、自分の地区の危険箇所を見つけるための連絡と地図づくりをする。</p>	<p>夏期休業前に保護者に連絡準備物を提示する。</p>
9	20	事前準備	<p>10/31と11/1の学習内容を知る。 DIGのグループを確認する。</p>	
9	27	事前準備	<p>活動の分担や組織づくりをする。</p>	
10	17	防災講話	<p>「東日本大震災から7年～今日までの記憶とこれからの未来～」</p>	<p>講師－常葉大 大玉瑞帆さん</p>
10	30	事前準備	<p>当日の活動と役割分担を確認</p>	
10	31	<p>避難所宿泊体験学習</p> <p>※避難所に宿泊</p>	<p>体験1「起震車体験」 体験2「簡易トイレづくり」 体験3「三角巾を使つての応急処置・搬送法」 体験4「避難所設営」 体験5「炊き出し訓練（夕食）」</p>	
11	1		<p>体験1「炊き出し訓練（朝食）」 体験2「避難所撤収」 体験3「DIG」</p>	
11	2	<p>まとめ新聞作成 お礼の手紙</p>		<p>各自作成</p>

イ 防災学習の日（5月9日）
（ア） 目標

- ・ AEDの使用方法や心肺蘇生方法について、体験を通して学習する。
- ・ 広域避難所としての東中学校について知り、避難所が設営される場合のテント設営方法について体験を通して学習する。
- ・ 消火器や南校舎の救助袋の使用方法について、体験を通して学習する。

(イ) 日程及び学習内容

	1組・2組 (60人)	3組・4組 (62人)	5組・6組 (62人)
8:30～	全体会 (趣旨説明・講師紹介・諸注意 等)		
9:00～	体験1 (体育館) 救急救命法 ・ AEDの使用方法 ・ 心肺蘇生法	体験2 (外保健室前) 避難所としての東中 ・ 避難所開設時 ・ テント設営	体験3 (外南校舎前) 救助袋の使用方法 消火器の使用方法
10:45～	体験3 (外南校舎前) 救助袋の使用方法 消火器の使用方法	体験1 (体育館) 救急救命法 ・ AEDの使用方法 ・ 心肺蘇生法	体験2 (外保健室前) 避難所としての東中 ・ 避難所開設時 ・ テント設営
	昼食・休憩		
13:15～	体験2 (外保健室前) 避難所としての東中 ・ 避難所開設時 ・ テント設営	体験3 (外南校舎前) 救助袋の使用方法 消火器の使用方法	体験1 (体育館) 救急救命法 ・ AEDの使用方法 ・ 心肺蘇生法
15:00～	全体会 (指導講評・講師へのお礼 等)		

ウ 防災講話 (10月17日)

- ・ 学校防災推進協力校の打ち合わせの際に、東日本大震災の経験等をお話しいただける方はいないかと相談をしたところ、静岡県教育委員会の健康体育課危機管理・安全班の長田清孝主査から今回の玉木瑞帆講師をご紹介いただいた。
- ・ 講師の玉木瑞帆さんは、岩手県釜石市出身で、中学1年生の時に東日本大震災を経験された。現在、常葉大学社会環境学部に在籍していらっしゃる。
- ・ 当日は、「東日本大震災から7年～今日までの記憶とこれからの未来～」という演題で、お話をいただいた。
- ・ 玉木さんは、現在大学で防災・減災のための勉強や取組をおこなっているとのこと。「地元の復興のために尽力している人もいるが、私は自分の経験をこれから災害が起こるであろう所で生かしたいと思っている。」という思いを聞き、その崇高な志に生徒も職員も深く感動をした。
- ・ 講話の後、玉木さんからは「生徒の皆さんが、メモをとりながら真剣に自分の話を聞いてくれて本当にうれしかった。これからも協力できることがあったら連絡してください。」というお言葉をいただいた。



講話の様子



講演する玉木さん

エ 避難所宿泊体験学習（10月31日～11月1日）

(ア) 目標

- ・ 避難所宿泊体験を通して、避難所生活のルールやマナーなどの集団行動を学習すると共に、避難所生活を送ることになってしまった方々の思いを知ろうとする。
- ・ 災害時に求められる知識や対応について、体験を通して学習する。


(イ) 日程及び学習内容

時間	活 動 内 容			
13:00～	全体会（趣旨説明・講師紹介・諸注意 等）			
13:30～	炊き出し訓練 【調理室】 ポリ袋調理体験…米をポリ袋へ入れ、炊き出す方法を学ぶ。	簡易トイレ作成と起震車体験 【金工室・外】 トイレの作り方を学ぶ。 後半は起震車体験。	応急処置救助訓練 【音楽室】 音楽室で三角巾を用いた手当のしかたや搬送法、救助法を学ぶ。	避難所設営 【体育館内】 体育館で宿泊できるような避難所設営計画を立て、設営する。
15:15～	全員、各体験場所から起震車の見学場所へ移動 起震車体験を全員が見学する。1回4人×2分、各クラス4人、6回の予定。グループ別学習で、起震車体験をしない生徒が体験する。全体で炊き出し訓練の説明を聞くため体育館へ移動する。全体会の隊形で並ぶ			
16:00～	全体で炊き出し訓練。米の入っているポリ袋に水を入れ、袋の口をしぼる方法を聞く。 米と水を入れた袋の口を縛り、その場に提出して体育館へもどる。 袋をつくった生徒から体育館へもどる。全体会の隊形で待つ。 学級全員が提出したら、学級でまとめて、その学級の炊き出しリーダーが調理室へ米を持ってくる。			
17:00～	米の加熱とレトルトカレーの加熱を待つ間、講話を聞く。【体育館】 テーマ「避難所での食事」 講 師 掛川市赤十字奉仕団掛川支部 窪野静子 様			

	活 動 内 容			
17:50～	炊き出し訓練係は、体育館のロッカーへ自分の荷物を置いて、サブアリーナへ集合し配置につく。他の生徒は、食事場所へ自分の持ち物をもってクラスごと移動する。			
18:00～	夕食の配膳と食事・片付け お茶を配布・記名する。 配膳が終了した学級から食事をとる。 食べ終わった学級は、ゴミ処理と片付けをする。			
18:45～	食事の場所で、一日の反省をする。			
19:30～	講話【体育館】 講師：掛川市役所危機管理課 危機対策専門官 小関直幸 様			
20:40～	就寝準備－避難所設営係の生徒は、体育館で就寝する場所を作る。その他の生徒は、本校舎の教室へ行き、その日の振り返りをする。避難所設営の生徒は、会場作りが終わったら、各教室へ行く。各クラスで健康観察を行い、歯みがき等就寝準備を済ませる。学級ごと、必要な物のみをもって体育館へ移動する。			
22:00	消灯			
6:00～	起床・洗面・片付け 段ボールは学級ごと積んでおく。 付けができた生徒から、本校舎へ行き、歯みがきや洗面を行う。 着替えと持ち物の片付けをしておく。 学級ごと教室から体育館へ移動			
6:40～	全体会 【体育館】			
7:00～	炊き出し訓練 アルファ米の ご飯を分配、 カップみそ汁 をつくる。	DIGリーダーの 打ち合わせ DIGの進め方や 準備物の確認	校内・外清掃 事前の分担計 画にそって活 動する	避難所撤収 体育館内の片 付け・清掃
7:30～	食事の場所へ移動する。炊き出し訓練係は、配膳の配置につく。 朝食準備と食事・片付け、お茶を配布・記名する。 食べ終わった学級は、ゴミ処理と片付けをする。			
9:00～	DIGの隊形で並ぶ。DIGのリーダーは、地図や文具をステージに取りに行き、準備をする。 その他の生徒は、朝の活動の反省をする。(振り返り用紙に記入する。) 中学生は、DIGの隊形になって待つ。 掛一小5年生が到着したら、それぞれ通学区ごとに分かれてもらう。			



夕食の準備

時間	活 動 内 容
9:30～	DIG（災害図上訓練） 講師 静岡県西部地域局 危機管理課 主査 鈴木圭介 様 小学生が退出する。 DIGリーダーは見送りをする。 他の生徒は文具・地図の片付けをする。  <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; display: inline-block; padding: 2px 10px;">DIGの様子</div>
11:45～	全体会 【体育館】
12:00～	教室へ移動・完全下校

(4) 2年次の研究の内容等

1年次同様、2年次も1年生を対象として防災教育を推進した。1年部職員が主となって活動していくことになるが、あくまで学校として防災教育に取り組む意味で、教育課程にしっかりと位置付け、他学年にどう波及させていくかなどについても考えた。また、指定が今年度で終わることから、日程面や予算面等での優遇のない普通の学校でも継続してできる「防災教育」の在り方についても、検討した。5月の打ち合わせで「ジュニア防災士」の資格取得が可能であるという話をうかがい、防災学習への動機付けとしても有効であろうと考え、その取得を目標の一つに加えた。

ア 学習計画

月	日	学習事項	学習事項・その他
5	16	第1回避難訓練	避難経路の確認、緊急災害時の避難方法の理解と体験。
8	26	第2回避難訓練	「南海トラフ地震に関連する情報」が発表された場合の生徒引き渡し手順の確認。
8	29	防災テーマ学習①	各自が決めたテーマに合わせて資料を用意し、その資料を元に新聞にまとめる。 図書室の本、市の図書館からお借りした資料、インターネットなどを使い、新聞を作成する。
9	5	防災テーマ学習②	
9	19	防災テーマ学習③	

月	日	学習事項	学習事項・その他
9	26	防災新聞発表会	新聞の発表会を行い、防災に対する興味や関心を高め、知識を身に付けさせる。
10	21	防災講話 (講師－玉木瑞帆様)	東日本大震災をはじめとする、防災についての講話を聞く。
10	24	防災学習事前学習	防災学習の最終確認をする。
10	29	防災学習の日①	これまでの学習に加え、以下の体験学習を行うことで、防災に関する知識や技能を高める。 体験1「救急救命法」 体験2「消火器の使用方法」 体験3「南校舎救助袋の使用方法」
10	30	防災学習の日②	体験4「DIG+災害時判断ゲーム」 体験5「起震車体験」
10	31	防災学習のまとめ	学習したことをまとめた新聞発表を行い、自分は地域のために何ができるかをまとめる。
12	1	地域防災訓練参加	自治区で実施される防災訓練に参加し、中学生の役割を果たす。 これまでの学習成果を発揮する。
12	6	第3回避難訓練	緊急地震速報と地震発生後の対応についての確認。

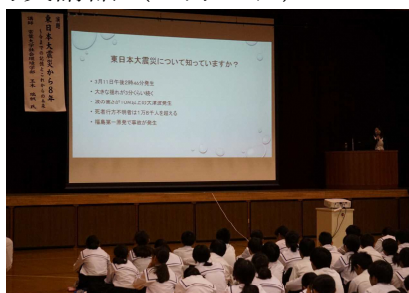
イ 防災訓練（5月16日・8月26日・12月6日）

- ・年間3回、予定されている避難訓練を充実させることにも取り組んだ。主には、訓練目的の明確化と、振り返りの充実である。
- ・第1回は、5月に避難経路や人員点呼の方法などの確認を目的とした訓練を行った。当日の訓練は、教室で地震が発生し、机の下に隠れ、地震収束後、速やかに一次避難場所に集合。更に二次避難場所に全校が集まり、全体で確認をするというものであった。全体には特に問題なくできたと感じられたが、事後に実施した職員や生徒に対するアンケートから、「避難経路が掲示されていない教室」「学年ごとに異なる一次避難所に集まるルート上の不備」「保健室の役割が不明確」といった課題が明らかになった。その後、そうした部分を修正し、防災関係のマニュアルを修正することができた。
- ・第2回は、例年、夏休み明けに行っている「引き渡し訓練」で、東南海地震の危険が相対的に高まったとの報道があったと仮定し、保護者に引き渡しを依頼するというものである。本年度は学区の3小学校中の2小学校と期日を合わせることができ、小中で兄弟関係のある家庭を想定しての取組となった。小中の引き渡し時間の差を1時間設ける配慮をした。自家用車での来校を禁じたため、参加する保護者が少なくなると想定さ

れたが、40%程度の家庭が協力してくれた。

- ・第3回は、12月に抜き打ち訓練の形式で行った。授業が終わり、清掃が始まる直前の時間に緊急地震速報が鳴り、地震が発生。揺れが収束した後、各学年の一次避難場所に集まるという内容であった。本校では、これまで抜き打ち訓練をしていなかったとのことで、生徒らは大変驚いたようであったが、その分、基本的な部分について確認する機会となった。事後アンケートからは「地震発生時には『倒れてこない・落ちてこない・動かない』場所に」「避難時は『おはしも』が大切」といった基本に触れる記述が多く見られた。

ウ 防災講話（10月21日）



講話の様子



講演する玉木さん

- ・昨年同様、岩手県釜石市出身で常葉大学社会環境学部にて在籍されている玉木瑞帆さんに講師をお願いした。
- ・「東日本大震災から8年～今日までの記憶とこれからの未来～」という演題で、お話をいただいた。生徒は、震災直後の写真や、刻々と変化していく震災後の状況が変化していく様子のお話を食い入るように見聞きし、最近あった台風による大雨や河川の氾濫等の被害と結びつけてお話考えていた。
- ・玉木さんは、来春大学を卒業され、その後は静岡県内の建設会社に就職が内定されており、大学で学んだ防災・減災の知識を実際に生かしていきたいとの決意を語ってくださった。静岡を災害から守りたいという強い気持ちが伝わってきた。
- ・生徒の感想からも「地震の揺れが怖いと思っていたが、その後の避難生活などで日常生活に戻れないこの方が大変だし、苦しいことがわかった」「地震が来たらどうしようと悩んでいるばかりだったけど、災害時の避難場所を確認したり、持ち出し品を用意したりと自分のできる対策を進めることが大切だと思った。」といったものが見られた。

エ 防災学習の日（10月29日～10月30日）

(ア) 目指す生徒像

- ・生徒自身が、自らの命を守り抜こうと主体的に行動する生徒
- ・安全で安心な社会づくりに貢献しようとする意識をもつ生徒
- ・生徒自身が、助けられる人から助ける人へ変容できる生徒

(イ) 目標

- ・ AEDや心肺蘇生法についての学習や体験を通して、技能を習得する。
- ・ 消火器や南校舎の救助袋の使用方法を体験し、災害時の対応方法を学習する。
- ・ DIG体験を通して、家庭内や通学区内で災害時に起こることを予想し、対応方法や知識を考える。



DIGの様子

(ウ) 日程及び学習内容

①10/29 (火)

時間	活動内容		
8:05～ 8:30～	朝の会 + 読書 (教室で出席確認) 移動 (体育館へ) 全体会 (趣旨説明・講師紹介・諸注意 等)		
9:00～	Aグループ	Bグループ	Cグループ
	体験1 救急救命法 (体育館) ・ AEDの使用法 ・ 心肺蘇生法	体験2 家庭内DIG (音楽室) ・ DIGの説明 ・ 家庭内の危険	体験3 救助法と消火器 (南校舎南側) ・ 救助袋の使用法 ・ 消火器の使用法
10:45～	移動・休憩		
	体験2 家庭内DIG (音楽室) ・ DIGの説明 ・ 家庭内の危険	体験3 救助法と消火器 (南校舎南側) ・ 救助袋の使用法 ・ 消火器の使用法	体験1 救急救命法 (体育館) ・ AEDの使用法 ・ 心肺蘇生法
13:30～	移動・昼食・休憩		
	体験3 救助法と消火器 (南校舎南側) ・ 救助袋の使用法 ・ 消火器の使用法	体験1 救急救命法 (体育館) ・ AEDの使用法 ・ 心肺蘇生法	体験2 家庭内DIG (音楽室) ・ DIGの説明 ・ 家庭内の危険
15:15～	全体会 (指導講評・感想発表 等)		

②10/30 (水)

時間	活動内容
8:05～	朝の会 + 読書 (教室で出席確認) 新聞づくり
9:35～	全体会 (趣旨説明・講師紹介・諸注意 等) ・DIG体験 (DIGのグループで体験) ・災害時判断ゲーム 講師 静岡県西部地域局危機管理課 主査 鈴木圭介 様
	移動・昼食・休憩
15:15～	起震車体験(駐車場にて、各クラス二回に分けて体験) 他の生徒は、新聞作り+お礼状作成



消火器の訓練



救急救命法学習の様子



家庭内DIGの様子

(5) 研究成果、次年度以降の展開

ア 1年目の成果

- ・学校防災推進協力校にあたり、保護者の理解と協力を得るため、平成30年6月に行われた学年懇談会の際に、「避難所宿泊体験」等についての説明を行った。本校の防災教育の現状を保護者に理解していただくよい機会になったとともに、その後の活動に対しても保護者の皆様に全面的に御協力いただくことができた。
- ・1年目のアンケートでは、「防災について学習してよかったか」という問いに対して、生徒の89%が「とてもそう思う」と答え、11%が「そう思う」と答えた。防災学習を行った成果を、生徒自身が十分に自覚していると考えられる。
- ・生徒の振り返りコメントからは、命の大切さを改めて見直し、中学生の自分たちにもできることを真剣に考えた様子が見えた。また、防災学習のスローガンとして掲げた「助けられる人から助ける人へ」の合い言葉が、防災学習以外の場面でも1年生のあるべき姿として、生徒の言葉の中に出てくるようになった。

- ・取組を行うにあたって、多くの方々や外部機関にご指導とご協力をいただいた。また、11月のDIG（災害図上訓練）では、掛川市立第一小学校の5年生と合同で行った。地域との連携を実践するよい機会となった。

イ 2年目の成果

- ・生徒アンケートでは、「防災について学習してよかったか」という問いに対して、生徒の85%が「とてもそう思う」と答え、15%が「そう思う」と答えた。防災学習を行った成果を、生徒自身が十分に自覚していると考えられる。

また、「東日本大震災を体験した玉木さんのお話を聞いたことは、自分のためになったか」という問いに対して、生徒の77%が「とてもそう思う」と答え、23%が「そう思う」と答えた。それまで震災の体験を今一つ、自分事としてとらえられなかった生徒たちも、自分たちと近い年齢の玉木さんのお話を聞くことで、身近なものと感じられたようだ。

体験に関するアンケートでは、5点満点方式でそれぞれの体験に点数を付けさせた。

○AEDと心肺蘇生法(4.82) ○救助袋と消火器(4.85)

○家庭内DIG(4.69) ○地域DIG(4.70) ○起震車体験(4.73)

いずれの体験も(4.5)以上の高い点数がついた。それぞれの活動が生徒のためになっていると考えられる。

- ・「防災学習で、自分の意識がどのように変わりましたか」のコメント

○「まあ大丈夫でしょ」になりがちだったけれど、「いつ起こるかわからない」「起こった時は、みんなの役に立てるようにしよう」と思うようになった。

○助けられる人から「助ける人」へ変わらなくてはいけないと思った。いつ災害が起きてもいいように備えることが大切だと感じた。

○液状化という言葉は知っていたけど、地域DIGをやって、自分の家の周りで液状化が起きると知り、怖いと思ったし、必要な対策を家族や地域の人と話し合いたい。

このように防災学習のスローガンとして掲げた「助けられる人から助ける人へ」が、生徒のコメントの中にも見られた。

- ・防災訓練終了後、アンケートを実施し、問題点を拾い出し、避難方法などを修正することができた。生徒のコメントをまとめた感想集を発行し、防災に対する意識を全校として高めることができた。

ウ 次年度以降への課題や方向性

(ア)本校の総合学習「掛川学」との関連

- ・本校の総合的な学習は以下の3点を目標としている。
 - 自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断し、問題を解決する資質や能力を身に付ける。
 - 総合的な学習の時間を通して、自分の生き方を考え、価値観や見方・考え方を広げる。

- 社会をよりよく生き、自分の生活を豊かにしていくための様々な技能（ソーシャルスキル）を身に付ける。
- この達成のために、地元「掛川市」を題材として、まずは地域や学校を知り、その上で地域や学校に応じた課題（職業や自己の将来に関わる課題を含む）を解決していくという「掛川学」というテーマの下、学習を進めている。これまで1年生では、「掛川を知る」をテーマに掛川の自然や産業、交通、歴史、文化といった側面から調べ学習を行い、新聞を作成。2年生では、職業体験と絡めて、「掛川で働く」をテーマとした、調べ学習や体験学習。3年生では、「掛川を考える」をテーマに、それまでに学習した事柄をまとめ、掛川市をもっとよくするための提案をするという流れであった。
 - 昨年の学校防災推進協力校指定を受け、1年生のテーマを「防災を通して掛川を知る」に変更し、通常のテーマ学習に防災の視点を取り入れたり、この2年間行った防災学習の日を設定するなどした。地域DIGなどもあり、掛川を今までとは異なる視点から見ることができた。このように、総合の掛川学に防災学習を取り入れることは十分、可能であるため、今後も継続していきたいと考えている。

(イ)持続可能な防災教育へ

- 従前の防災教育は「年3回程度の避難訓練」「年1回程度の学活」だけで、それ以外にはあまり行われることはなかった。東海地震や東南海地震の可能性が叫ばれている静岡県にありながら、本校は津波の被害が想定されない地域であることから東日本大震災以降も防災教育の状況は大きく変わることはなかった。
- 昨年度から取り組んできた「防災学習」で、それまで行っていなかったいろいろな活動をするようになった。2年連続で行った「防災学習の日」や、昨年の「避難所宿泊訓練体験」のようにそれまでの何倍も時間や費用をかけ、外部団体のご協力も得ながら、進めることができた。今まで行っていなかった活動のため、不安や負担は少なくはなかったが、生徒にとっては大きな収穫となる活動ばかりであった。しかし、指定が終わることから、同じ活動はできなくなる中で、「持続可能な防災教育」の在り方を模索しなくてはならないと考えている。
- そこで1年生の総合を「防災教育」の中心とする体制はそのままに、今年度から取り組んでいる「ジュニア防災士」の資格取得をその中心に置く。「助けられる人から助ける人へ」のスローガンは継続とし、10月末の学年運営期間に本年度同様、「防災学習の日」を設定し、12月の地域防災に参加し、資格の取得を目指す。また、カリキュラムマネジメントの意識を高め、社会科や理科でも防災教育を推進する。従来の年3回の避難訓練も、設定を変えたり、事前事後指導と絡めたりして充実を図るなどして、「持続可能な防災教育」を目指していきたいと考えている。